

けいぎじゆく くぼぜんりょう
奚疑塾と窪全亮

稲城市東長沼2111
☎042-378-2111
発行 1998.9.25



窪全亮（前列中央）と塾生たち（明治27年5月、神田明神にて）

東長沼の八坂神社の東側に奚疑塾の跡があります。奚疑塾は、明治13年から大正2年までの34年間にわたって小学校修業者を対象に開設された私塾で、漢学者窪全亮によって設立されました。

窪全亮は弘化4年（1847）に大丸村の久保長右衛門の長男として生まれました（本名は、久保素郎）。実家は、酒・味噌・雑貨などを商う福田屋という商店でした。幼年より学問にすぐれ、常楽寺の文應和尚のすすめで寺の徒弟となり修行にはげみました。文久元年（1861）14歳の時に上京し、星野介山や大沼沈山という漢学者に師事し、指導を受けました。明治4年、24歳の時に帰郷し、長沼郷学校の教師、博文学会、済美学校の訓導として、若者たちに漢学を教えました。

明治12年（1879）、学制が廃止され教育令が公布されたのをきっかけにして、翌13年10月に正式な私立学校として、東長沼の自宅に奚疑学舎を設立しました。のちに奚疑学舎は奚疑塾という名称にかわりますが、「奚疑」という名称は、陶淵明（中国の六朝時代の詩人）の「歸去来辞」の一節である「樂夫天命復奚疑」からとったものでした。史料によると、「小学年齢外ニシテ、学費乏ク、中学或ハ他ニ就テ学フ能ハサル子弟ノ為メニ設ク」、「満十四年以上ニシテ、普通小学中等科卒業以上ノ者」を教育の目的・対象にして設立されたことがわかります。学科は六等に分けられ、それぞれに読書科、習字科の二科を設け、修業年限は4年とされていました。のちに学科は、読物、作文、習字、算術となり、さらに明治の終わり頃には、英語も取り入れられました。塾の運営は、月30銭の授業料を唯一の収入に維持されており、遠方からの入学者のために寄宿舎も整備

されていました。

生徒と教員の数、明治24年（1891）には生徒60名、教員1名、明治32年（1899）には生徒68名、教員3名でした。卒業生の数は、明治43年（1910）発行の「奚疑塾同窓会員名簿一覧」によると、732名（うち女性は34名）でした。ただ同窓会員総数のうち市域出身者は183名で25%にすぎず、3/4は市域外からの入塾者によって占められていました。しかし、小学校の尋常科を卒業した子供たちが、すべて奚疑塾に入学できたわけではなく、ほとんどの子供たちは、農業に従事し、一部の有産者の子弟のみが入学することができました。その割合は尋常科卒業生の1割にも満たなかったようです。

大正2年（1913）の窪全亮の死によって奚疑塾は閉鎖されますが、その間の約30年間に、多摩三郡や橘樹郡、都筑郡の若者を中心に、東京市や他県の出身者も含め、おそらく800名を超える塾生を生んだこととなります。窪全亮の学徳を慕って、非常に広範囲な地域から青年たちが集まってきたことは、特記されるべきことです。

窪全亮の死後、大正5年（1916）に奚疑塾同窓生たちの寄付により、窪全亮の自宅前に銅像が建立されました。鶴川街道に面して建つこの銅像は、奚疑塾の卒業生や多くの村民たちによって、その学徳をたたえられていましたが、太平洋戦争による影響が深刻になってきた昭和18年には、寺院の梵鐘などとともに供出されてしまい、その姿を偲ぶことはできなくなりました。しかし、昭和61年4月29日には、この銅像の跡地に窪全亮先生しょうとくり頌徳碑が奚疑塾の卒業生とその子息たちによって建立されました。

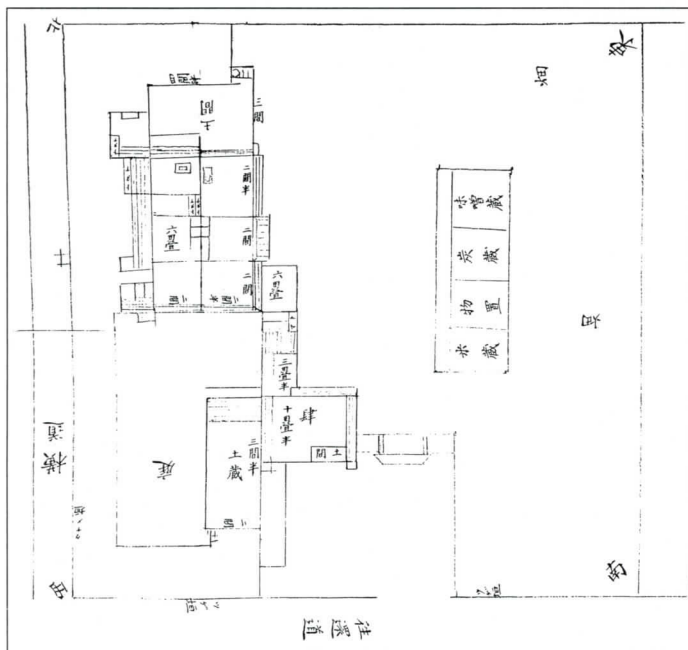
参考文献『窪全亮先生と奚疑塾』1986年



窪全亮 44歳の肖像(明治23年)



窪全亮著の「古素堂詩鈔」



奚疑塾の配置図



大正5年建立の窪全亮の銅像